

2014年2～5月展示 ジャン＝ジャック・ルソー主要作品 原書展

ジャン＝ジャック・ルソー(Jean-Jacques Rousseau)は、1712年にジュネーヴで生まれ、フランスで活動した思想家、文学者です。『人間不平等起源論』や『社会契約論』では民主主義理論を唱えてフランス大革命の先駆者と言われ、『新エロイズ』などの文学作品などではロマン主義の父とされています。

『エミール』(副題:「または教育について」)はルソーが50歳の時に刊行され、近代教育学の古典のひとつに数えられています。文明社会に歪められることのない自然人の理想を目指して、エミールという名の架空の生徒がどのように育てられていくかを物語風に描いた作品です。また『エミール』は自由主義教育論であると共に、ルソーの宗教観、社会観、道徳観を含んでおり彼の思想の頂点をなす作品とも言われています。しかしこうした著作は当時の権力者にとっては大胆な挑戦と捉えられ、出版後まもなく禁書とされルソーはその後漂泊の旅を続けました。死後に刊行された自叙伝『告白』では赤裸々に自己が語られています。

池袋図書館が部分開館した一昨年は、ルソー生誕300年にあたっていました。図書館所蔵の『エミール』初版本(1762年デュシェーヌ版)の他、『社会契約論』、『人間不平等起源論』などを展示します。

また、展示資料には、立教大学図書館ホームページの「デジタルライブラリ」にアクセスし、全頁を閲覧できるものもありますので、ぜひご覧ください。

立教大学図書館

『エミール』より

「われわれは弱いものとして生まれ、力を必要とする。われわれは何一つもたないで生まれ、助けを必要とする。われわれは愚かなものとして生まれ、判断力を必要とする。生まれるときにはもたず、大人になって必要なすべてを、われわれは教育によっては与えられる。」

『社会契約論』より

「人間は自由なものとして生まれている。しかも、いたるところで鉄鎖につながれている。自分が他の人々の主人であると考えている者も、彼ら以上に奴隷なのである。」

『人間不平等起源論』より

「祖国は自由なしに、自由は徳なしに、徳は公民なしに存在できるものではない。」

(参考: 福田歓一著『ルソー』岩波現代文庫)



<展示資料>

1. 『人間不平等契約論』全1巻
Discours sur l'origine et les fondemens de l'inégalité parmi les hommes.
Amsterdam : M. Michel, 1755. lxx, 262 p. : ill. ; 21 cm 4.
2. 『社会契約論』全1巻
Principes du droit politique / par J.J. Rousseau. Amsterdam : Chez Marc Michel, 1762. viii, 323 p. ; 20 cm
3. 『フランス音楽に関する手紙』全1巻
Lettre sur la musique françoise : sunt verba & voces, praeterea que, nihil / par J.J. Rousseau. [S.l.] : [s.n.], 1753. 92 p. ; 20 cm
4. 『ボーモンへの手紙』全1巻
A Christophe de Beaumont, Archevêque de Paris, Duc de S. Cloud, Pair de France, Commandeur de l'Ordre du Saint Esprit, Proviseur de Sorbonne, & c ; avec sa lettre au Conseil de Genève. Amsterdam : Chez Marc Michel Rey 1763. xl, 125 [i.e. 129] p. ; 19 cm
5. 『エミール』全4巻
Émile, ou, de l'éducation / par J.J. Rousseau. Amsterdam : Jean Néaulme, 1762. 4v. : ill. ; 17cm (12mo)
6. 『告白』全4巻
Les confessions de J.J. Rousseau, 4 v. 1782-1789. 21 cm
7. 『新エロイズ』全6巻
Lettres de deux amans, habitans d'une petite ville au pied des Alpes / recueillies et publiées par J.J. Rousseau. Amsterdam : Chez Marc Michel Rey, 1761. 6 v. : ill. ; 17 cm
8. 『山からの手紙』
Lettres écrites de la montagne / par J.J. Rousseau. Amsterdam : Chez Marc Michel Rey, 1764. 2 v. in 1 (334, 226 p.) ; 21 cm
9. 『民約訳解：巻之1』 / 戒雅斐騷著；中江篤介訳 東京：仏学塾出版局, 1882 57p ; 19cm
10. 『民約論』 / 戒雅屈蘆騷[J.-J.ルソー]著；服部徳訳 東京：有邨壮一、1877 1冊 18cm

参考資料

- 『エミール』ルソー著 今野一雄訳 上中下3巻(岩波文庫) 1962
『ルソー』桑原武夫編 岩波新書 1962
『ルソー全集』全8巻 樋口謹一訳 白水社 1980
『ジャン=ジャック・ルソー論』吉岡知哉著 東京大学出版会 1988
『フランスにおけるルソーの「告白」』桑瀬章二郎著 シャンピオン 2003
Les Confessions de Jean-Jacques Rousseau en France. Honore Champion, 2003
『社会契約論/ジュネーヴ草稿』ルソー著；中山元訳 光文社古典新訳文庫 2008
『思想』1027号 2009年 11月号
特集：ジャン=ジャック・ルソー問題の現在--作品の臨界をめぐって
『ルソーを学ぶ人のために』桑瀬章二郎編、世界思想社 2010年
等

ジャン＝ジャック・ルソー「エミール」初版本の挿絵について

立教大学総長（法学部教授） 吉岡知哉

『エミール』初版本には5葉の銅版画が挿絵として挿入されている。これらの挿絵は、本文中でルソーが言及するギリシア神話に対応している。挿絵の解説と、挿絵に対応する『エミール』本文の当該箇所を以下に記す。

なお翻訳は樋口謹一氏によるもの（『ルソー全集』（白水社））であり、同全集の巻数とページ数を示す。ギリシア神話については、高津春繁『ギリシア・ローマ神話辞典』（岩波書店）を参照した。

<1>アキレウスの母である海の女神テティスが、息子を不死にしようと考えて冥府の河ステュクスに浸している場面。

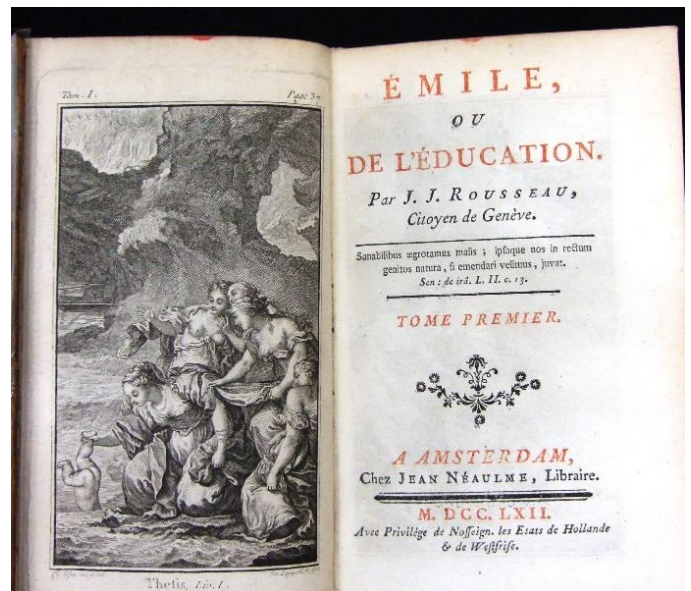
このとき、テティスはアキレウスの踵を持っていたため、踵だけが水につからず、アキレウスは不死にならなかった。トロイア戦争の時、アキレウスはパリスが射た矢を踵に受けて死亡する。

[本文との対応]（第1篇 『全集』第6巻32頁～33頁）

第1篇のはじめの部分で、ルソーは、同時代の母親が子育てを行わなくなっていることを自然に反すると批判する（フェミニズムからのルソー批判の論点の一つである）。同時に、母親による過保護が子供を柔弱にし、かえって子供の将来の危険を増すことになることと指摘する。テティスがアキレウスをステュクスに浸けたという物語は、幼い頃から子供を鍛える必要があるという文脈で用いられている。

「テティスは、自分の子アキレウスを不死身にするために、寓話によれば、冥府のステュクス川の水にひたした。この話の意味するところは美しくかつ明らかだ。私がいま語っている残酷な母親たちは別のやりかたをしている。子どもを柔弱さにひたすことによって、苦痛の未来をあたえてやり、子どもの毛穴をあらゆる種類の病にあけてやって、大きくなったときかならずやそうした病の餌食になるようにしむけているのだ。

[中略] 子どもがいつか耐えねばならない打撃の訓練を子どもにしてやりなさい。季節、風土、環境の苛酷さに、飢え、渇き、疲労に対して体を鍛えてやりなさい。ステュクス川の水につけなさい。」



<2>半人半馬のケンタウロス族の賢人ケイローンが、幼いアキレウスに競走を押している場面。

アキレウスの母テティスは息子を育てなかつたので、父ペーレウスがケイローンに預けた。アキレウスは俊足で知られる。

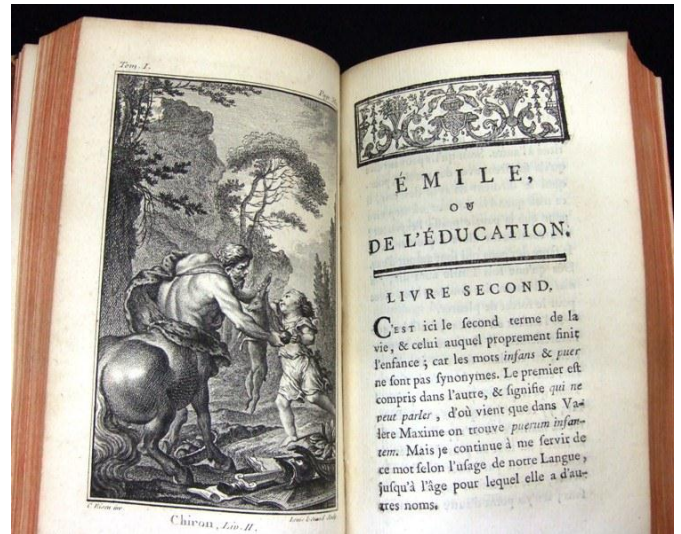
ケンタウロスは野蛮であるとされるが、ケイローンは賢明で正しく、音楽、医術、狩り、運動競技、予言の術に優れている。

[本文との対応] (第2篇 『全集』第6巻178頁)

十歳ころの時期に、子どもの五感の発達を促し、体を訓練する段階が訪れる。ここでルソーは、不精で怠惰な子どもに駆けっこの訓練をした経験談を記してる。

「どうしたわけかわからないが、自分のような地位の人間はなにもなすべきでなく、なにも知るべきではない、貴族としての身分は腕の力、脚の力、その他あらゆる種類の能力の代わりになってくれるべきだ、と彼は確信していた。このような紳士を速足のアキレウスにすることはケイロンの巧妙さをもってしても十分ではなかったろう。」

ルソーは、お菓子を賞品にするという方法で、子どもに競走をするモチベーションを持たせる。



<3>ヘルメースが諸学問の基礎知識を石柱に刻んでいる場面。

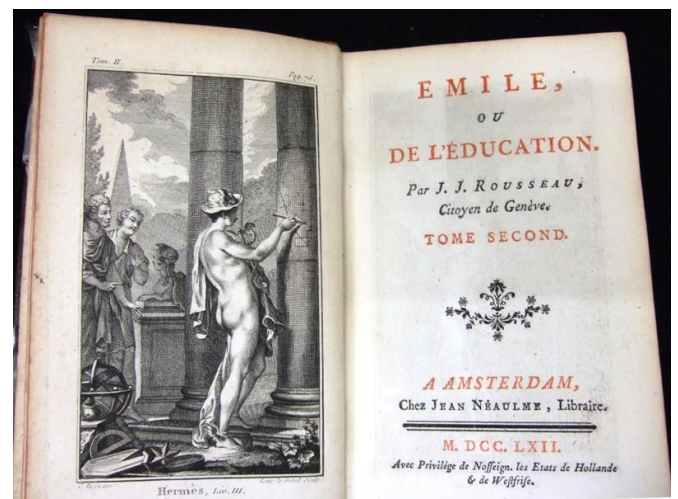
ヘルメースはゼウスの末子でオリュンポス12神のひとり。神々の使者であり、すばらしい知恵と技術とを持つ。富と幸運の神であり、商売、盗み、賭博、競技、旅の保護者である。アルファベット、数、天文、音楽、度量衡などの知識のほか、豎琴、笛も発明した。ちなみにヘルメースは、ペタソスという鍔の広い旅行帽をかぶり、ケーリュケイオンという杖を持ち、翼のついたサンダルをはいた美青年として描かれる。

[本文との対応] (第三篇 『全集』第6巻242頁)

15歳ころの子どもに知識を教えるにあたって、ルソーは、それらの知識が「役にたつ」ものであることを、子どもにわからせることが必要であると強調する。モンモランシの森で道に迷ったエミールは、太陽の位置から方角を知るという経験によって天文学の有用性を知る。理解できない観念を説くことには意味がないとルソーは言う。

「私は書物を憎む。書物は、知らないことについて語ることを教える。ヘルメ

スは初学の基礎的原理を石の柱に刻印して、自分の発見を大洪水からまもろうとした、とのことだ。彼がこれを人間の頭に刻みつけたら、それは伝統によって保存されたことであろう。十分訓練された頭脳は、人間の知識をもっとも確実に刻印しうる記念碑なのである。」



<4>詩人であり音楽家であるオルペウスが、人々に宗教を伝えている場面。

オルペウスはホメーロス以前の最大の詩人、音楽家であるとされる伝説上の人物。豎琴と歌の名手であり、彼の歌には野獣も草木も聞き惚れたという。

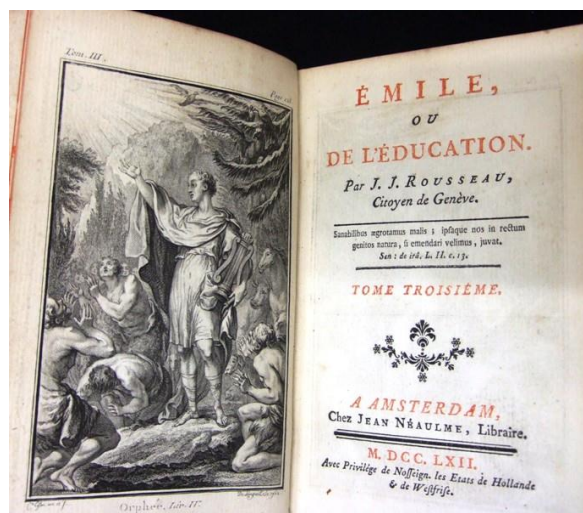
オルペウスは蛇に噛まれて死んだ妻エウリュディケーを追って冥界に下った。彼の歌を聴いた冥界の王ハーデースと妃ペルセポネーに許されて妻を連れもどす途中、誓いを破って後ろを振り返ったために、エウリュディケーは冥界に引き戻されてしまった。古代ギリシアの秘教オルペウス教の創始者とされる。

[本文との対応] (第4篇 『全集』第7巻63頁)

『エミール』第4篇はそのなかに、「サヴォアの助任司祭の信仰告白」と題するやや独立した文章を含んでいる。そこには、ポー川のほとりの丘の上で、助任司祭が「私」に説いた、宇宙の秩序と神の存在についての考察、そして「神は私に、善を愛するようにと良心を、善を知るようにと理性を、善を選ぶようにと自由をあたえている」という自覚について述べられている。ルソーの「自然宗教」と呼ばれるものである。

以下は、その「信仰告白」の中程で、助任司祭の話が途切れたところの文章である。

「善良な僧侶は力をこめて語った。彼は感動しており、私もそうだった。私は神にひとしいオルフェウスがはじめて讃歌をうたい、人間に神を崇めることを教えるのを聞くかのように思った。しかしながら、私には彼に反論すべきことが数多く見てとれた。だが一つも反論しなかった。」



<5>魔女キルケーが、豚に変身させることができなかつたオデュッセウス（ユリシーズ）に屈服する場面。

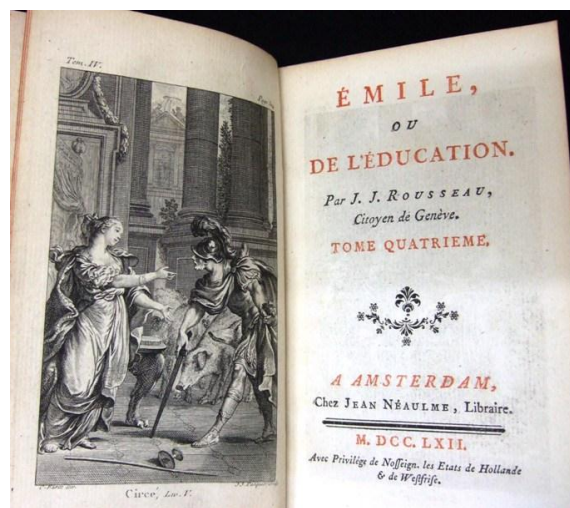
キルケーはアイアイエー島に住み、人間の男を家畜に変えて暮らしている。オデュッセウスの仲間は酒を飲み豚に変えられてしまうが、オデュッセウスだけはヘルメース神から得た魔除けの霊草モーリュのおかげで変身させられず、逆に仲間を人間に戻して救い出す。その後、オデュッセウスはキルケーに魅せられてこの地に1年間留まった。

[本文との対応] (第5篇 『全集』第7巻290頁)

『エミール』第5篇は、「ソフィ、または女性について」という女性教育論と、青年期に達したエミールとソフィの恋愛物語によってなりたっている。フェミニズムからの強い批判がなされることでも有名な部分である。

親方のもとで働いているエミールの仕事場にソフィと母が訪ねてくるというエピソードの後に置かれているのが以下の文章である。

「ソフィが愛の生む真の配慮について寛大であるのではない。反対に、強圧的で、要求も多い。ほどよく愛されるくらいなら愛されないほうがましだと思っている。自分の美質に高貴な誇りをもち、自分を意識し、自分を重んじ、自分が自分を敬っているように敬われたいと思っている。彼女の心の全価値を感じ取れず、彼女の魅力と同じくらい、いやそれ以上に彼女の徳のゆえに彼女を愛しないような心をさげすむ。彼女よりも自分自身の義務を優先しないような、それ以外のものならすべてに彼女を優先しないような心をさげすむ。彼女のおきて以外におきてを知らぬ恋人はもちたくない。彼女は男性を彼の心をゆがめはせず支配したい。オデュッセウスの道連れどもをいやしい動物に変えたあとで、キルケーは、彼らをさげすみ、ただ一人変えられなかつたオデュッセウスに身をささげたのも、そうだったのだ。」



『エミール』 思考のブリコラージュ

立教大学文学部教授 桑瀬章二郎

『エミール』という書物を魅力的かつ恐ろしく難解にしているのはその雑種性であるといえる。この書物を初めて手に取る読者は必ずこう感じるはずだ。すべてがグダグダであると。作者ルソーは興の趣くままにペンを走らせ、関心ある主題には立ちどまり、逆に難解な主題については都合の良い断定ですませ、しかも自らの考察をなんの脈絡もなしに継ぎ接ぎしていくように見える。母親の役割、言語習得、身体の鍛錬、富や所有の観念の習得、職業の選択、そして学課や読書、宗教・・・こうした教育に関するさまざまな論点をルソーはもれなく取り上げ、まったく自由に論じ、これでもかとてんこもりにしていくのだ。もちろんそこには、政治体についての考察（『エミール』が『社会契約論』とほぼ同時期に出版されたことは決定的な意味を持っている）、そして隠遁＝定住の知識人というイメージに反し、絶え間なく移動する作家であったルソーの面目躍如たる旅行論、さらにはデカルトを片手に感覚論哲学（コンディヤック）、唯物論哲学（デイドロ）の狭間を猛スピードで駆け抜ける「サヴォワの助任司祭の信仰告白」という挿話をも付け加えねばならないだろう。こうした議論が、厳密な理論的体系的論述の形を取ったかと思うと、突然弛緩したような物語形式となり、さらには読者へのアイロニカルな呼びかけ、次には挑発的な論争の警句となって積み重ねられていくのだ。

教育に関する主題をもれなく扱おうとするルソーが、その時代には論じることが極めて困難であった、だが彼自身は教育論の中心的主題となりうるものとみなしていたある一つの視点に、特別な場所を与えていることは偶然ではない。性（セクシュアリティ）がそれである。今日でさえ生真面目な論者によってしばしば都合よく消去されてしまうこの主題に、『エミール』のルソーは否定しようのない重要性を付与している。ルソーは、『告白』という自伝で、一人の人間の形成に性（セクシュアリティ）がどのような役割を果たしているか、ほとんど精神分析家のような視点から検討しえた作家である。エミールという架空の青年の成長過程を辿るルソーが、この主題を忘れるはずがない。

こうしてルソーは大真面目で「欲望」の生成について語りはじめる。ところがここでもすぐさま彼の語りはグダグダになってしまうのだ。たとえば語り手は青年となったエミールにソフィーなる架空の女性を「与え」ようとするのだが、この（少なくともエミールにとって）理想の女性をめぐるルソーの論述は錯綜し、哲学的論述は空想的な小説へと逸脱していくように見える。そもそも、なによりも貞淑で非の打ち所がない女性をルソーが持ち前の想像力を遺憾なく発揮しながら小説家の筆致で描き出すときほど、彼の思考が危険な倒錯的世界に接近するときはない。主従関係の逆転につぐ逆転の息苦しい物語は、「自然な」性関係など実は存在せず、それを完成された人為として生きることが近代人に残された唯一の選択肢であるというルソーの悲観的なメッセージであるようにさえ見える。

近年、ポストモダニズムへの反動から、『エミール』を精緻な理論的著作として読み直そうとする「哲学的」解釈が影響力を持ちはじめている。しかしまずはこの書物の言いようのないグダグダ感を楽しむべきではないだろうか。